説教20210919ヤコブ3：16-4：6　マルコ9：30-37

「平和を実現する人たち」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

弟子たちは、イエス様のいないところで、「だれが一番えらいか」を議論していました。

「だれが一番えらいか」つまり、弟子たちは、自分こそ一番偉いのだ、と主張して止まなかったのでしょう。なんかバカバカしい議論だと思いませんか。そんなことを議論する暇があったら、もっと仕事しろ！と言われかねない弟子たちの有様であります。その有様は少々マンガチックでもあります。

なぜ、私たちはそう思うのでしょうか。それは、今の現実の世の中でも、私たちがそれと似たような誰が一番偉いのか競争をしているからに他ならないでしょう。私たちは、そんな競争をしても無駄だし、幸せに至る道ではないことを、頭でわかったとしても、体がいうことを聞かない、というようなこともあるでしょう。

会社にあっては、私は社長の息子だから一番偉い、ですとか、私は一番仕事が出来るから一番えらいのだ、と言ったような思いが湧き上がってくるかもしれません。又、学校にあっては、私はテストの点が一番高いから、偉いのだとか、生徒会でみんなを取りまとめているから一番偉いのだ、といったような思いを抱く生徒もいることでしょう。

　しかし、よく考えてみますと、そういう自らを誇って、偉いと思っている時間というのは、全く人の役に立っていない時間でありますし、それどころか、周りの人との間の溝を深めてしまうことにもなりかねない危険性も秘めているでしょう。一言でいうと、自分を誇って、偉いのだと思うことは罪であります。

　また近頃は、マウントを取るというように言って、自分が属するグループの中で一番偉い人になって、そのグループを牛耳っていこうとするやり方がよく語られます。このように、自分が一番偉い人になりたがる、ということは私たちの身近でよく起こることであり、私たちはそういう行いに慣れっこになってしまって、そこに潜んでいる深い罪に思いを致すことができにくくなっています。しかし、今日のヤコブの手紙の聖書箇所を読んでみてください。4章1節「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争い合う欲望が、その原因ではありませんか。」このように自分の心の内で点火した小さな高慢の火種が、いつしか周りに燃え広がり、燎原の火のように人々を焼き尽くすといった出来事が、この世の中でも数多く起こっています。

　そういった人間の罪深い思いに引き換え、主イエスの思いは全く違うところにあります。それを聖書は「上から出た知恵」と言い表しています。3章17節「上から出た知恵は、何よりもまず、純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐れみと良い実に満ちています。偏見はなく、偽善的でもありません。」

如何でしょうか、自分を誇って、偉ぶっている人間の知恵と、上からでた神の知恵はこれほど違うことなのであります。

　さて、今日の福音書で、弟子たちがなぜ、「だれが一番えらいか」の議論をしだしたのかといいますと、この時、弟子たちの心が主イエスから離れていたからです。

マルコによる福音書9章32節に「弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった」と書いてあります。イエス様は弟子たちに再び、十字架での死と復活について予言をされましたが、弟子たちはこの成り行きを信じたくても信じられず、このイエス様の予言に近づくことを恐れ、遠ざかったのであります。イエス様から遠ざかったとき、私たち人間は何をし始めるでしょうか。一番やりそうなことは、自らが神の立場に立つこと、言い換えれば自らが、小さな神となることです。この時の弟子たちも例外ではありません。イエス様から遠ざかった弟子たちは、各自がそれぞれ小さな神となって世界を牛耳ろうという思いが心に芽生えたのに違いありません。

よく註解書などでは、この時の弟子たちはイエスという王のもとで、それぞれ偉い大臣の地位につくために競い合っていた、という風な解説が成されていますが、私の黙想では、いわゆる「二頭政治」というような体制が思われました。つまり国家には、二つの性格が異なるトップが並び立っているということです。日本では天皇と、首相がおり、イギリスでは王様と首相がおり、イスラエルでは大統領と首相がおるといった具合です。では、主イエスの王国では、イエス王と誰が並び立つのか。このことを弟子たちは議論して熱くなっていたのではないでしょうか。このような議論をすることは、それ自体で非常な罪でありますが、主イエスから遠ざかっていた弟子たちにはそのことが分からなかったのです。

　弟子たちがこの時自らを小さな神と思い、主イエスと並び立つ者になろうとしたことは、この「偉い」ということのもとの意味に立ち返ればよくわかってきます。そもそも偉いってどういうことでしょうか。「本当に偉い人は偉ぶらない」とも言われますが、人間が偉いというのはどういうことなのかは再度考えてみる必要があると思います。結論から言えば、聖書では、人間は誰も偉くないのです。偉いといえるのは主なるイエスキリストただ一人なのです。

さて「偉い」は英語でグレート、もとのギリシャ語ではメガであります。メガというのは数量の単位にもなっていまして、１００万倍という意味です。聖書の頃は１００万倍を現わすメガで、人の力をはるかに超えた、人知の及ばない神の業のことを形容しました。ですから、この時弟子たちは誰が一番メガな存在かを議論しあっていたのです。メガな人間になりたいというのは、アダムとイヴが禁断の木の実を食べてしまった罪にならうような、罪な思いであります。しかしアダムの末裔である私たち人間はその罪な思いからなかなか解放されることが出来ません。

ガリラヤ湖に船出した、弟子たちとイエス様が乗った舟にメガな突風が吹き付けました。しかしイエス様の一声で、それはメガなナギの状態に変えられました。そして弟子たちはイエス様の力にメガに恐れを抱いて「いったいこの方はどなたなのだろう」と言い合いました。

「だれが一番えらいか」を議論していた弟子たちは、この時、自分自身がこのメガな力をふるってみたいという誘惑に駆られていたことでしょう。でも、冷静に考えて、ただの人間がそんな神業が出来るようなメガな人間になれるものでしょうか。冷静に考えれば、そんなマンガチックな考えは、一笑に伏してしまうことが出来ますが、集団の力というのは怖いもので、弟子たちはこの時、輪になって、真剣になってこの議論をしていたに違いありません。

　日本では歴史的に人間が神に祭り上げられることがよく起こりました。豊臣秀吉も徳川家康も明治天皇も、神様扱いをされていました。今から振り返れば、まあ、そんな偶像崇拝に縛られた時代もあったのだなあと冷静に振り返ることが出来ます。が、まさにその時代に居合わせた者にとっては、それが現実であり、いやがおうでもその状況に投げ出されるのであります。又、それは今という時代でも例外ではないかも知れません。今の時代の偶像崇拝とは何でしょうか。あるいはそれは、自分自身がメガな人間になりたいという思いかもしれません。

　さてそろそろ、自分を誇って偉ぶっている人間の知恵の愚かさについては語りつくしたと思われますのでそろそろ、上からでた神の知恵について語りたいと思います。

　私たちが上から出た神の知恵に包まれ、それを行っていくには、まず、発想の転換が必要でしょう。上から出た知恵を常に保持するためには、イエスキリストから離れては出来ないことです。それはこの時の弟子たちの姿を反面教師として学べば明らかであります。ヤコブの手紙には私たち人間が出来そうで出来ないこと、出来なさそうで出来ることが沢山記されています。ヤコブの手紙4章 3節「願い求めても、与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求めるからです。」このことはクリスチャンに取っては当たり前のことであります。なぜならば、私たちが主イエスに願い求めるのは、主なる神の御心がなることであって、自分の願望がなることではないからです。しかしそう頭では理解できていたとしても、私たちの体は往々にして納得しないのであります。まさに、ゲッセマネの祈り、私の思いではなく、父よ、あなたの思いが成し遂げられますように、というイエス様の必死のお祈りのことが、ここにも記されているのです。人は大人になっても、自分自身の思いが成し遂げられるようにと願ってしまうものです。ですからヤコブは筆を尽くして、人がその様な人間の知恵に縛られることなく、上からの知恵により頼むことを、力説しているのです。3章18節「義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです。」この聖句も今まで何べんも聞かされて頭では理解しているけれども、体はその様な行いをしないということもあるでしょう。平和を実現していく、ということは主の平和が増し加えられていくことです。教会でいえば、ますます教会が聖霊で満たされ、全員が神の前に安らい、主の栄光が栄えていくことであります。このようなことは、人間の知恵では起こらない、上から出た知恵によるのだと聖書は語ります。具体的には、上から出た知恵とは「何よりもまず、純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐れみと良い実に満ちています。偏見はなく、偽善的でもありません」と記されています。さて私たちは、どうすればこれらのことを頭で理解するだけではなく、体で行っていくことが出来るようになるのでしょうか。

　今日のマルコ福音書には、イエス様が、一人の子供の手を取って、弟子たちの真ん中に立たせて、抱き上げるという振る舞いが知るされています。この弟子たちは「誰が一番偉いか」ということを議論していた者たちです。イエス様はこの時の弟子たちに対して、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」という御言葉で戒められてから、このように一人の子供を登場させたのです。このことはその場に居合わせた者たちにとって、意表をつく出来事であったことでしょう。なぜ、ここで子供なの？ということです。しかしここで発想の転換がもたらされたのです。それまで弟子たちは、人間の知恵による偉さに凝り固まっていたことでしょう。自分の能力を語っては自分の偉さを説明していたことでしょう。もし仮に、ここでイエス様が、真正面から、上からの知恵を持ち出して、人間の知恵の小ささを指摘したとしても、弟子たちは納得したでしょうか。それは分かりませんが、イエス様がここで弟子たちに、はっきりと語りたかったことは、自分から遠く離れてしまった弟子たちの罪と、それとは対照的に自分と触れ合っているこの子供の正しさであります。子供というのは自分を誇ることもできず、ただ、親などから恵みを与えられて生かされている者ですが、その体をイエス様が抱き上げるとき、子供は上からの知恵に満たされ正しくされます。大人も同様です。私たちはイエス様に抱きかかえられ歩まされるとき、決して自分を神として偉ぶることは出来ません。ただそこには謙遜があります。そしてその様な状態でこそ、私たちは平和を実現する人となり、義の実をまくことが出来るようにされるのです。

祈ります

天の父

主よ、あなたは私が、もっとも辛く、絶望しているときに、私を抱きかかえ守り、歩ませてくださいます。そしてまた、私の手を取り、よいおこないへと導いてくださいます。私たちは、あなたの御守りと導きに感謝し、賛美を捧げます。

　どうか私たちを聖霊で満たし、悪い思いと、言葉、行いを遠ざけ、平和、公正、従順の善き実りを得させてください。

　私たちを謙遜にし、あなたからの恵みを、その都度、余すところなく受け取ることが出来るようにしてください。

　あなたは子供を抱きかかえられ、人間が主と共に歩まされる模範を、体で示されました。私たちもそれにならい、心と体を用いて、あなたに礼拝し賛美していくことが出来ますように。

　今、闘病や療養の生活を送られる方が世界中で多くおられます。どうかみ恵みによってその方々の体と心を強め、病に打ち勝たせてください。又施術や看病にあたられる病院の方々を励まし、その業を全うすることが出来るようにしてください。

父と聖霊とともに